

「森の芸術祭 晴れの国・岡山」

FOREST FESTIVAL OF THE ARTS OKAYAMA:
CLEAR-SKIES COUNTRY

詳 細 計 画



「森の芸術祭 晴れの国・岡山」実行委員会

令和6年5月29日

目次

1	開催趣旨.....	3
2	芸術祭コンセプト.....	4
3	開催概要.....	5
	(1) 名称.....	5
	(2) 会期.....	5
	(3) 開催エリア	5
	(4) 主催.....	5
	(5) アートディレクター	6
	(6) ロゴマーク	7
4	プロジェクトの構成.....	8
5	展覧会内容.....	10
	(1) 展覧会概要	10
	(2) 各エリアの特色と作品設置会場.....	11
	(3) 参加アーティスト	17
	(4) アートイベント.....	33
6	広報	34
	(1) 方針.....	34
	(2) 取組内容.....	34
7	交通対策.....	37
	(1) 方針	37
	(2) 取組内容.....	37
8	来場者への対応	39
	(1) 方針	39
	(2) 取組内容.....	39
9	観光・文化関連イベント	41
	(1) 方針	41
	(2) 取組内容.....	41
10	地域連携・学校連携	43
	(1) 方針	43
	(2) 取組内容.....	43
11	サポートスタッフ	44
	(1) 方針	44
	(2) 取組内容.....	44

12	企業協力・協賛	45
	(1) 方針	45
	(2) 取組内容.....	45
13	鑑賞券・オフィシャルグッズの展開.....	46
	(1) 方針	46
	(2) 取組内容.....	46
14	スケジュール概要	48

1 開催趣旨

岡山県北部には、中国山地の雄大な自然、旧街道の宿場町や城下町として栄えた歴史ある街並み、古くから受け継がれた伝統芸能、多彩な農産物など、瀬戸内海沿岸部とは異なる風景、文化、魅力的な地域資源が数多くあります。

これらの地域の魅力をこれまで以上に広く認知してもらうため、私たちは新たな切り口として「アート」が秘める大きな力に注目しました。

近年、全国各地で芸術祭が盛り上がりを見せており、県北部においても、美作三湯芸術温度など、アートを基軸とした地域活性化の取り組みが広がっています。アートには、新たな視点で地域の魅力を引き出し、地域を元気にする力があります。

こうした力を活用し、国際芸術祭「森の芸術祭 晴れの国・岡山」の開催をきっかけとして、県北部の魅力を国内外に広く発信し、訪れた方に特別な体験を提供したいと考えています。

本芸術祭では、国境、人種、性別等の垣根を越えた、多様なアーティストの作品に出会うことができます。さらに、作品を通じて、作者の感性やメッセージに触れることで、自身の想像力を刺激し、新たな価値観が生まれ、芸術文化の素晴らしさに気づくことができます。このような特別な体験は、訪れた方にとって大きな財産になると同時に、舞台である県北部は、素晴らしい思い出の地として刻まれるでしょう。

また、アート作品を核に、観光資源との周遊も生まれ、地域全体の観光消費拡大と交流人口の増加に繋がるものと考えています。

地域の方々にとっても、アーティストや観光客との非日常的なふれあいは、地域の潜在的な魅力を再認識し、より一層、地域を誇りに感じるきっかけになると確信しています。

「森の芸術祭 晴れの国・岡山」が、岡山ならではの、県北部ならではの国際芸術祭として、観光振興、文化振興、そして地域振興の新たな起点となるよう、県全体で取り組んでいきます。

2 芸術祭コンセプト

古代より大和と出雲を結ぶ出雲街道が東西に延び、近世には城下町・宿場町として栄えたこの地には、さまざまな伝統建築や工芸、芸能などのレガシーが残されています。大地や森からは果物や木材などの恵みがあり、その豊かさをサステイナブルにするためのさまざまな試みがなされており、なかでも木質バイオマス発電などの森林資源を生かした取り組みは SDGs の先駆モデルとして評価されています。また蒜山高原をはじめ、美作三湯、鍾乳洞など、過度に観光地化されていない悠々とした時空間は、エコロジー思考における新しい可能性を秘めています。

森の芸術祭という名称は、温暖な気候、豊かな水や資源、食など、私たちが生きる上での大切な要素を満たしているこの地域の、自然の恵みや文化、人々が集まる場所としての多様性と豊かさを象徴する「森」からきています。

本芸術祭は、その「森」がもたらす「恵み」を芸術の力で未来に向けて活性化することを目的とし、「本当に必要な資本とは何か？」を問いかけます。美術館や記念館や学校などの文化施設、水やエネルギー、食の供給といった生活のインフラ、自然環境を共通の資本と考え、アーティストのみならず、建築家、科学者、民俗学者といった専門家も交え、地域の人々の協力を得ながら「新しい資本」をつくりあげていきます。

芸術は多様な考えを反映するとともに、これを人々に共感させ、新しい世界やものの見方に向けての想像力を養います。それは「驚き」「感動」「わくわく感」「ときめき」「生きていることの喜び」「深く感じ考えることの充足感」をもたらします。県北というひとつのエコロジーが芸術のエネルギーを得て、人々の心や感性をリフレッシュさせる「場」に変容します。晴れの国の森の住民たちの祝祭は、それを祝う祭となります。

アートディレクター 長谷川 祐子

3 開催概要

(1) 名称

「森の芸術祭 晴れの国・岡山」

(英語表記) Forest Festival of the Arts Okayama: Clear-Skies Country

(2) 会期

2024 年 9 月 28 日 (土) ～ 同 11 月 24 日 (日)

休館日は、原則として月曜日 (祝日の場合翌日) とする。

(3) 開催エリア

津山市、高梁市、新見市、真庭市、美作市、新庄村、鏡野町、勝央町、奈義町、西粟倉村、久米南町、美咲町 (うちアート作品設置市町は津山市、新見市、真庭市、鏡野町、奈義町)

(4) 主催

「森の芸術祭 晴れの国・岡山」実行委員会

会 長 伊原木隆太 (岡山県知事)

副 会 長 谷口圭三 (津山市長)

〃 戎 斉 (新見市長)

〃 藤原乗将 (西日本旅客鉄道 (株) 理事 中国統括本部岡山支社長)

顧 問 久徳大輔 (岡山県議会議員)

アートディレクター 長谷川祐子 (金沢 21 世紀美術館館長、東京藝術大学
名誉教授)

地域文化アドバイザー 岸本和明 (奈義町現代美術館館長)

太田三郎 (現代美術作家)

構成団体 岡山県、津山市、高梁市、新見市、真庭市、美作市、新庄村、鏡野町、勝央町、奈義町、西粟倉村、久米南町、美咲町、西日本旅客鉄道 (株)、(公社) 岡山県観光連盟、美作国観光連盟、(公社) 岡山県文化連盟、岡山県教育委員会、大学コンソーシアム岡山、岡山県市長会、岡山県町村会、岡山県経済団体連絡協議会、(一社) 岡山県商工会議所連合会、岡山県経営者協会、(一社) 岡山経済同友会、岡山県中小企業団体中央会、岡山県商工会連合会、(公社) 岡山県バス協会、(一社) 岡山県タクシー協会、(一社) 岡山県レンタカー協会、全日本空輸 (株) 岡山支店、日本航空 (株) 岡山支店、(一社) 日本旅行業協会中四国支部岡山地区委員会、

(一社) 全国旅行業協会岡山県支部、岡山県旅館ホテル生活衛生
同業組合

(5) アートディレクター

長谷川 祐子

金沢 21 世紀美術館 館長 /
東京藝術大学 名誉教授
国際文化会館アートデザイン部門ア
ドバイザー

キュレーター／美術批評。京都大学
法学部卒業。東京藝術大学大学院美
術研究科修士課程修了。水戸芸術館
学芸員、ホイットニー美術館客員キ
ュレーター、世田谷美術館学芸員、金
沢 21 世紀美術館学芸課長及び芸術
監督、東京都現代美術館チーフキュ
レーター及び参事を経て、2021 年 4
月から金沢 21 世紀美術館館長。文化



庁長官表彰 (2020 年)、フランス芸術文化勲章 (2015 年)、ブラジル文化勲章
(2017 年)。

主な企画展・国際展に、第 7 回イスタンブール・ビエンナーレ「エゴフーガ
ル」(2001 年)、第 4 回上海ビエンナーレ (2002 年)、第 29 回サン・パウロ・
ビエンナーレ (2010 年)、第 11 回シャルジャ・ビエンナーレ「re-emerge,
toward a new cultural cartography (リ・イマージ： 新たな文化地図をもとめ
て)」(2013 年)、第 7 回モスクワ・ビエンナーレ「Clouds⇄Forest」(2017 年)、
第 2 回タイランド・ビエンナーレ (2021 年) など。

主な著書に、『キュレーション 知と感性を揺さぶる力』(集英社)、『「なぜ？」
から始める現代アート』(NHK 出版)、『破壊しに、と彼女たちは言う：柔らか
に境界を横断する女性アーティストたち』(東京藝術大学出版会)、『ジャパノ
ラマ-1970 年以降の日本の現代アート』(水声社)、『新しいエコロジーとア
ート-「まごつき期」としての人新世』(以文社) など。

(6) ロゴマーク



デザインコンセプト

芸術祭のビジュアル・アイデンティティは、光と影の二面性から着想を得ています。そして、新鮮で現代的な色彩を用いたメッシュ状のデザインは、地元の工房で作られた繊細な草木染の織物から着想を得ており、デザインに明るさと透明感を生み出しています。また、県北の自然を撮影した写真と組み合わせることで、芸術祭と景観との共生を表現することができます。

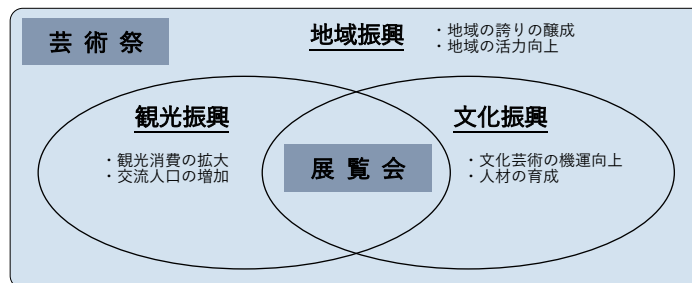
デザイナープロフィール：バーンブルック・スタジオ（イギリス）

バーンブルック・スタジオは、1990年にジョナサン・バーンブルックによって設立されました。デザインは社会にポジティブな変化をもたらすことができると信じ、世界各地でさまざまな文化的、社会的プロジェクトに取り組んでいます。代表的な作品に、デヴィッド・ボウイのレコードジャケットがあり、彼の最後のアルバム「ブラックスター」では、グラミー賞を受賞しています。また、日本との関係も深く、東京の森美術館や六本木ヒルズのブランディングを手がけています。

4 プロジェクトの構成

本プロジェクトは展覧会を核として、観光振興と文化振興の2本の柱から構成し、県北部及び県全体の地域振興を図ります。

アーティストとの交流や多くの観光客が地域を訪れることにより、地域の方々が今まで気づかなかった地域の魅力を再認識し、地域を愛する心や誇り、いわゆるシビックプライドの醸成に繋がるとともに、開催にあたっては、地域づくりに関わる人々をはじめ、多彩な人材とも積極的に連携し、地域の活力向上を図ります。



<観光振興>

2020年からの新型コロナウイルス感染症の影響により観光関連産業は深刻なダメージを受けてきましたが、観光需要は本格的な回復期を迎えています。現状の課題として、本県を訪れる観光客は交通網の充実した県南部に集中していることに加え、ポストコロナへの大きな転換期にあたり、ポストコロナ期の県北部の観光振興の施策を中・長期的な視点から実施する必要があります。

そこで、国際芸術祭という新たなコンテンツを起点に、県北部に観光客を呼び込み、既存の観光資源も最大限活用し、滞在・周遊型の観光振興を図ります。

これにより、県北部のみならず県全体の観光消費拡大及び交流人口増加に繋げることを目指します。

<文化振興>

県北部では、美術館等での意欲的な企画展の開催や、アーティスト・イン・レジデンスなどの多彩な取り組みにより、積極的に地域にアートを取り入れる素地ができています。加えて、近年では、美作三湯芸術温度などのアートイベントが盛り上がりを見せており、アートを活用した地域づくりへの機運が高まっています。

本芸術祭において、国内外のアーティストによる多様で質の高いアート作品に触れる機会を創出することにより、県民のアートに対する関心をさらに

高め、県北部はもとより県全体の文化芸術の機運を一層盛り上げます。併せて、多くの県民に本芸術祭に関わってもらうことにより、アートによる地域活性化に取り組む人材の育成も図っていきます。特に、大学との連携や、ワークショップ、イベントなどを通じて、学生や生徒、児童など若い世代に文化の可能性を伝え、参加してもらうことで、次世代の地域の人材育成を図ります。

5 展覧会内容

(1) 展覧会概要

本芸術祭は、国内外からアーティストや音楽家、ダンサー、建築家、デザイナー、華道家、料理シェフなど幅広いジャンルのクリエイターを迎え、新作の展示や、場所に合わせたユニークなプロジェクトを展開します。

5市町、6つのエリアの会場において展開されるプロジェクトは、場の歴史や環境を反映したもの、あるいは場を未知の想像空間に変容させるものなど多様です。この小さな旅を通して来場者に県北の魅力と未来への可能性を見たり感じたりしていただけるよう、アートの魔法の杖が活躍します。

2ヶ月間の祭の後は、一部の作品のほか、料理のレシピや協働のシステムといった形のない資本がレガシーとして残されていきます。

また、会期中には、来場者が参加できるアートイベントを市町の協力のもとに開催します。

ここにあるすべての命の営みの素晴らしさを世界とつなげ、祝福する森の祭となります。

(2) 各エリアの特色と作品設置会場

津山／津山城周辺エリア

特色・コンセプト

津山市は、豊かな歴史や文化を有し、現在も県北部の中心都市です。

中心部は、江戸時代には、津山城（鶴山公園）を中心に東西に城下町が栄え、当時建てられた木造建築と、明治・大正時代に建築された欧風建築が立ち並び、往時の繁栄と豊かな歴史を感じることができる場所となっています。また、1936年に建設された旧津山扇形機関車庫や、国の名勝に指定されている衆楽園なども有し、津山市の歴史や文化の集積地の一つでもあります。

このように、このエリアには、自然環境、歴史、文化等の資本が交錯して現在のかたちが形成されています。衆楽園の庭園、古い町屋、大正時代の洋館、近代の歴史としての鉄道館など、江戸時代から近代への歴史をたどる場所が、アーティストたちが紡ぐ物語によって現代によみがえります。そこには工芸や手仕事への再評価とアップデートも含まれます。

会場



作州民芸館



衆楽園



城西浪漫館（中島病院旧本館）



城東むかし町家（旧梶村邸）



津山国際ホテル跡地



つやま自然のふしぎ館



津山城（鶴山公園）



津山まなびの鉄道館



PORT ART & DESIGN TSUYAMA

津山／グリーンヒルズ津山エリア

特色・コンセプト

津山市中心地の北側に位置し、中国山地を望む丘陵地に広がる緑豊かな公園「グリーンヒルズ津山」は、25ヘクタールの広大な敷地内に、カフェや遊歩道、フラワーガーデンなどが点在し、地域の憩いの場として広く親しまれています。この広がりを生かしたパフォーマティブなプロジェクトが展開されます。

会場



グリーンヒルズ津山

特色・コンセプト

奈義町は、中国山地の秀峰「那岐山」の南麓に位置し、季節ごとに自然と調和した雄大な姿を眺めることができます。また、移住や子育てへの支援を充実させることにより、2019年の合計特殊出生率が2.95と全国トップクラスであり、少子化対策の「奇跡の町」と称されています。

世界的な建築家である磯崎新氏が設計した「奈義町現代美術館」は、作品と建物が半永久的に一体化した公共建築として世界で初めての体感型美術館です。また、江戸時代から受け継がれてきた伝統芸能「横仙歌舞伎」は、年4回の定期公演を中心に地元に大切に守られています。

「奇跡の町」は、コミュニティ全体のユニークな意識の共有が背景にあります。それを取り込みながら、共有ヴィジョンの象徴となっている美術館や伝統芸能に新たな光を当てていきます。

会場



シンボルロード



屋内ゲートボール場
「すば一く奈義」



奈義町現代美術館

まきどう
新見／満奇洞・井倉洞エリア

特色・コンセプト

新見市は、岡山県の北西端部、一級河川高梁川の源流に位置し、清らかな水と自然豊かな地域で、市南部にはカルスト台地が広がっており、複数の鍾乳洞が見られます。その中でも「満奇洞」と「井倉洞」は特に有名です。「満奇洞」は、歌人 与謝野鉄幹・晶子夫妻が、「奇に満ちた洞」と絶賛したことから「満奇洞」と言われるようになった全長 450m の鍾乳洞です。「井倉洞」は、全長 1,200m、高低差 90m におよび、洞内には様々な形をした奇石や怪石や、約 50m の天の岩穴から落ちる滝などがあり、自然の偉大さ、力強さを感じることができます。

悠久の時を経て生み出された自然の造形美は、色彩豊かにライトアップされ、幻想的な世界が広がっています。アーティストによる音と映像のインスタレーションが太古と現代を繋ぎます。

会場



井倉洞



ふれあいセンター満奇



満奇洞

サテライト会場



まなびの森 新見図書館

真庭／蒜山エリア

特色・コンセプト

真庭市は、岡山県北部のほぼ中央に位置し、なだらかな高原に広大な牧草地が広がる蒜山地域は、全国屈指のジャージー牛の飼育地となっています。

サステイナブルの価値をより多くの人に知ってもらうための観光文化発信拠点施設「GREENable HIRUZEN」では、施設の象徴となる建築家・隈研吾氏が設計・監修した「風の葉」をはじめ、ミュージアムやショップ、アクティビティを通じて、楽しみながら持続可能な暮らしを体感できます。また、市内には、かつては使われないまま森に放置されていた残材を活用する木質バイオマス発電所があり、そこで作られた電気は市の施設や地域の小中学校などで使われています。

ここでは森の資源とサステナビリティ、共有をテーマにした作品が展示されます。

会場



GREENable HIRUZEN

サテライト会場



勝山町並み保存地区ほか

鏡野／奥津エリア

特色・コンセプト

鏡野町は、中国山地を背景とした森林地域の豊かな自然環境に恵まれた地域です。

吉井川沿いの3キロに渡り流れる奥津溪は透明度が高い美しい水が流れ、秋は紅葉の絶景が広がり、素晴らしい溪谷美を眺めることができます。

溪谷を歩いて行くときの空間や光の変化、水や木々の表情、これにアートを足すのではなく、これらの美をより生き生きと伝える仕掛けをアーティストが提案します。

会場



奥津溪



奥津振興センター

(3) 参加アーティスト (姓のアルファベット順)

タレク・アトウイ

Tarek Atoui



The Wind Harvester_Thailand Biennale
at Chiang Rai © Wanchai Phutthawarin

1980 年、ベイルート（レバノン）生まれ。現在はパリ在住。アーティスト、電子音響音楽の作曲家。ダイナミックなインスタレーションや、実験的な音響環境、共創的なパフォーマンスなどを通じて、音という媒体や、音が人間の認知を実体化するあり方について探究している。アトウイは、様々な国の作曲家や工芸作家との共同作業を通じて、強い彫刻的オーラを放つ複雑な楽器を発明する。幅広い素材と知識を融合させることで、ブロンズや水、ガラス、石などといった素材の音響的特性や、音の伝達や反射のユニークな特質について実験を繰り返している。カスタムメイドの電子機器やコンピューターを用いて、アトウイは現代の社会・政治的状況に言及するとともに、表現やアイデンティティの力強い要素として音楽やテクノロジーを提示する。様々な地域のコミュニティとコラボレーションし、自らが生み出した多感覚的環境への鑑賞者の参加・体験をも促すアトウイの制作活動において、教育や人間関係は欠かすことのできない重要な要素となっている。アトウイは、S.M.A.K.ゲント市立現代美術館（ゲント、2024 年）、アートソングセンター（ソウル、2023 年）、リヨン現代美術館（ヴィルールバンヌ、2023 年）、シドニー現代美術館（シドニー、2023 年）、ザ・コンテンポラリー・オースティン（テキサス州オースティン、2022 年）、FLAG アート財団（ニューヨーク、2022 年）、フリデリツィアスム美術館（カッセル、2020 年）、セラルヴェス財団（ボルト、2018 年、2022 年）、ジャン大公近代美術館（MUDAM、ルクセンブルク、2022 年）、南洋理工大学シンガポール現代アートセンター（シンガポール、2018 年）、クンステンフェスティバルデザール（ブリュッセル、2017 年）、ベルゲン・アセンブリ（2016 年）、バークレー美術館&パシフィック・フィルム・アーカイブ（2015 年）、フオンダシオン・ルイ・ヴィトン（パリ、2014 年、2015 年）など、数多くの主要な美術館や展示施設にて展示を行っている。主なパブリック・コレクション先には、テート・モダン、グッゲンハイム・コレクション、モナコ美術館、シャルジャ・コレクション、ピノー・コレクション、フランス国家コレクション、カディストなどがある。

パオラ・ベザーナ

Paola Besana



Paola Besana, "Una Strada Lunga" (1971)

1935 年生まれ。(2021 年没)

多様な社会的・文化的文脈から発展した高度な「織り」の技術の可能性に魅せられ、「織り」の 3 次元性を探究したテキスタイル作品を制作したアーティストである。時として巨大なスケールに達したそのテキスタイル彫刻は、民衆文化と現代的な抽象美術とをひと続きの線上に位置付けている。また、自作の制作と並行して、織物工房であると同時に研究・生産・教育センターでもある「Studio di Tessitura Paola Besana（ストゥディオ・ディ・テッシトゥーラ・パオラ・ベザーナ）」を 30 年以上にわたって主宰し、スタッフのパオラ・ボンファンテ、ララ・ランツァとともに、産業用テキスタイルや建築、舞台芸術、ファッションのためのテキスタイルのデザインに取り組んだ。また、従来は技術の表現として一般的であったパターン論ではなく、技術理論に基づいた新たな教育手法も開発した。教育・研究活動と並行して、織り製品や織りサンプル、伝統的な織物やテキスタイルのライブラリーなどからなる膨大なコレクションも収集・管理した。そのコレクションは現在、「パオラ・ベザーナ・アーカイブズ」で見ることができる。

ビアンカ・ボンディ

Bianca Bondi



Screaming in Astral Ponds, 2022 Photo : Jean-Christophe Lett © MAMAC, Nice / Bianca Bondi / ADAGP

1986 年、ヨハネスブルグ(南アフリカ)生まれ。パリ在住。

領域横断的な活動を実践するアーティストで、主に塩水を使った化学反応により、ありふれた物体を活性化あるいは崇高化する。ボンディが作品の素材とする物体は、予想される変化や、その物体が本来備えている固有性や象徴性などを基準として選定されている。視覚を超えた体験を創出し、相互の連関、はかなさ、生と死のサイクルといった概念に焦点を当てながら、「物質の生命」に目を向けさせようとするのがボンディの試みである。生態学やオカルト科学に情熱的ともいえる関心を寄せ、そのふたつを融合させることで多分野横断的で可変的な作品を生み出す。ボンディの作品では物体の「アウラ」が重要な役割を果たしている。置かれる場所と作品とが強い結びつきを示す、サイトスペシフィックで詩的な作品も多く手掛けている。

江見正暢

Masanobu Emi



万華鏡

1947 年生まれ。

東京写真短期大学（現東京工芸大学）卒。江見写真館代表取締役社長。

1873 年に津山で創業した江見写真館には、大正末期から昭和初期の津山の風景や人物など、ガラス乾板で残された約 10,000 点もの貴重な写真（3 代目江見正 撮影）が残されており、5 代目の江見正暢がデジタル化したアーカイブを Web サイトで見ることができる。

写真館営業の傍ら、40 年以上ステンドグラスの制作にも取り組み、ランプや万華鏡の小さな世界に魅了され、現在も制作を続けている。

数年前に始めた Instagram をきっかけに、国内外を問わず多くの方と交流し、長年の試行錯誤の中で得たコツや技を広く共有している。

レアンドロ・エルリッヒ

Leandro Erlich



レアンドロ・エルリッヒ《スイミング・プール》2004

金沢 21 世紀美術館蔵

撮影：渡邊修

写真提供：金沢 21 世紀美術館

1973 年、アルゼンチン生まれ。現在はパリ、ブエノスアイレス、モンテビデオの 3 都市を拠点としている。

エルリッヒの作品は過去 20 年間にわたって世界各国で展示されてきた。また、その作品はブエノスアイレス近代美術館（ブエノスアイレス）、ヒューストン美術館（ヒューストン）、テート・モダン（ロンドン）、ボンビドー・センター（パリ）、金沢 21 世紀美術館（金沢）、ローマ現代美術館（MACRO、ローマ）、エルサレム美術館（エルサレム）など、権威ある美術館や著名な個人コレクターのコレクションに収蔵されている。

エルリッヒのパブリックアート作品は高い注目を集めている。ブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館（MALBA）の《シンボルの民主化（オペリスク）》や、パリで開催された国連気候変動枠組条約締約国会議（COP21）に合わせて制作された《溶ける家》、「ニューブランシュ」（パリ）の《建物》、ブエノスアイレスで開催された夏季ユースオリンピックのための《ボール・ゲーム》、韓国国立現代美術館ソウル館（MMCA）で展示された《反射する港》、越後妻有アートトリエンナーレ（新潟）で展示された《パラプセスト》などのプロジェクトが知られている。

これまで、中央美術学院美術館（CAFAM、北京）、ブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館（MALBA、ブエノスアイレス）、ブラジル銀行文化センター（ブラジル国内複数都市）、パレス美術館マイアミ（PAMM、マイアミ）、ボンビドー・センター・メス（メス）などで開催された大規模な展覧会に参加し、来場者数の記録を何度も塗り替えてきた。

コンセプチュアル・アーティストであるエルリッヒの作品は、視覚的枠組みを通じて、私たちの現実認識の土台を揺さぶり、その基礎となるものに疑義を呈する能力について探求する試みである。私たちの身の回りにあるありふれた建築は、エルリッヒの作品に繰り返し用いられるテーマであり、その作品は私たちが信じるものと私たちが見ているものとの間に対話を創出することを狙いとしている。エルリッヒは自らの作品を通じて、美術館やギャラリーの空間と日常的な体験との間の距離を縮めようとしている。

東勝吉

Katsukichi Higashi



東勝吉《オニ杉》/ 2004 / 由布院アートストック蔵

1908 年、大分県日田市生まれ。（2007 年没）

木こりを引退した後、老人ホームで暮らしていた東は、83 歳のときから本格的に絵筆を握り、大分県由布院の風景画の制作に没頭した。2007 年に 99 歳で亡くなるまでの 16 年間で、珠玉の水彩画 100 余点を描いた。主な展覧会に「東勝吉素朴画展」（由布院駅アートホール、1997 年）、「故郷に錦を飾る」（日田市民文化会館、2009 年）、「Walls & Bridges 世界にふれる、世界を生きる」（東京都美術館、2001 年）など。

東山詩織

Shiori Higashiyama



「Green Dimensions」
水彩、色鉛筆、和紙、パネル / 53×65cm/ 2023
Watercolor, colored pencil and japanesepaper
mounted on wood panel /
53×65cm/2023

1990 年、兵庫県生まれ。

2016 年東京藝術大学修士課程修了。

人と人との境界線を重要な観点とし、自分の心身を守る無意識、意識的な行為や物(テントや木、マットレス、フェンス、物語などのフィクション、武器や防具、陣形図、生垣)をリサーチし平面作品を制作している。モチーフをパターンのようにして反復し描き、異なるスケールとパースが入り混じった空間を構成する手法を用いる。

主な展覧会に、「Personal Hedges」(NADiff apart、東京、2023 年)、「boundary line」(second 2.、東京、2022 年)、「VOCA 展 2024」(上野の森美術館、東京、2024 年)、「日本国憲法展」(無人島プロダクション、東京、2023 年)などがある。

AKI INOMATA

AKI INOMATA



昨日の空を思い出す
Thinking of Yesterday's Sky
2022- ongoing

©AKI INOMATA

1983 年、東京都生まれ。東京在住。

デジタルハリウッド大学大学院特任准教授 / 早稲田大学嘱託研究員。2008 年東京藝術大学大学院 先端芸術表現専攻 修了。

生きものとの関わりから生まれるもの、あるいはその関係性を提示している。主な作品に、「やどかりに『やど』をわたしてみる」(2009 年・制作中)、「犬の毛を私がまとい、私の髪を犬がまとう」(2014 年)など。主な個展に、十和田市現代美術館 (2019 年、青森)、北九州市立美術館 (2019 年、福岡)、ナント美術館 (2018 年、フランス)。国際展・グループ展に、「あいち 2022」(2022 年、名古屋)、「Broken Nature」ニューヨーク近代美術館 (2021 年、米国)、第 22 回ミラノ・トリエンナーレ (2019 年、トリエンナーレデザイン美術館、イタリア)、タイ・ビエンナーレ 2018 (クラブ) など。作品の主な収蔵先に、ニューヨーク近代美術館、南オーストラリア州立美術館、金沢 21 世紀美術館、北九州市立美術館など。

磯崎新

Arata Isozaki



ISOZAKI Arata
Nagi Museum of Contemporary Art, 1993,
Watercolor on paper, 17.4 x 18.0cm
© Estate of Arata Isozaki

1931 年大分市生まれ。(2022 年没)

1954 年東京大学工学部建築学科卒業。1963 年磯崎新アトリエを設立。以後、国際的な建築家として、群馬県立近代美術館、ロサンゼルス現代美術館、バルセロナオリンピック競技場などを設計。近年では、カタール国立コンベンションセンター、ミラノアリアンツタワー、上海シンフォニーホール、湖南省博物館、中央アジア大学、中国河南省鄭州市の都市計画などを手がけた。世界各地の建築展、美術展のキュレーションや、コンペティションの審査委員、シンポジウムの議長を務めた。代表的な企画・キュレーションに「間－日本の時空間」展（1978-1981 年）、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館コミッショナー（第 6 回～8 回）、同展日本館展示「亀裂」で金獅子賞受賞（1996 年）、建築思想の国際会議「ANY 会議」を 10 年に渡り企画（1991-2000 年）。著書に『建築における「日本的なもの」』（新潮社、MIT Press）、過去 50 年間に渡り書いてきた文章を編集した『磯崎新建築論集』（全 8 巻、岩波書店）など多数。建築のみならず、思想、美術、デザイン、文化論、批評など多岐にわたる領域で活躍。2019 年「ブリツカー賞」受賞。

ウメッシュ・P・K

Umesh P K



Light flows like water, 2017
© Umesh P K

パローダ（ヴァドーダラー）在住のインド人アーティスト。

人間の周囲にある自然界をインスピレーションに、すでに失われてしまった人間と自然とをつなぐ回廊をテーマとした作品を制作している。その芸術活動を支えているのは、神話や表象の歴史、精神世界などに対する関心である。ウメッシュの作品に登場する緑豊かな風景は、インド最南部、豊かな生態系を誇る西ガーツ山脈とアラビア海沿岸部に挟まれた細長いケララ州で育った幼少期の体験がベースになっている。ウメッシュ自身の言葉によると、創作活動は瞑想的なものであり、絵画史上の様々なムーブメントや各地の絵画の伝統を参照しながら、絵画をその基礎的な構成要素——色の相互作用、線や形の遊び、二次元の平面にもたらされる空間感覚など——から理解しようとする試みなのだという。

ポース・クリシュナマチャリのキュレーションによる「Lokame Tharavadu」（世界はひとつの家族／コチ＝ムジリス・ビエンナーレ財団の主催により 2021 年にアラブプーザで開催）など、様々な展覧会やアート・フェスティバルに参加している。

片桐功敦

Atsunobu Katagiri



《LIGHT OF FLOWERS》

2021 年

1973 年、大阪府生まれ。華道家、花道みささぎ流家元。

中学卒業後に米国留学、1994 年帰国。1997 年、家元を襲名。2005 年、堺市で教室とギャラリーを兼ねた「主水書房」を開設、若手アーティストの発掘、展示や出版など多岐にわたって展開。東日本大震災後の福島を訪れ、原発周辺の地で再生への願いを伝える作品を製作、撮影した『SACRIFICE ー未来に捧ぐ、再生のいけばな』(青幻社)を 2015 年に上梓。

作品のスタイルは、小さな野草をいけたものから現代美術的なインスタレーション作品まで幅広く、いけばなが源流として持つアニミズム的な側面を掘り下げ、文化人類学的な観点から植物と人間の関係性を紐解くことを目指している。国内外での個展、ワークショップを中心に活動している。

川島秀明

Hideaki Kawashima



Hideaki Kawashima

Guide

2023

oil, acrylic on canvas

194.5 x 162.0 cm

Photo by Kenji Takahashi

©Hideaki Kawashima, Courtesy of Tomio Koyama

Gallery

1969 年、愛知県生まれ。

1991 年東京造形大学卒業後、1995 年から 2 年間比叡山延暦寺での仏道修行などを経て、2001 年アーティストとしての制作活動を開始した。活動初期より川島は一貫して自意識と向き合い、顔、そしてそこに現われる繊細で複雑な感情を描き続けてきた。川島作品を観る者は、うっすら塗られた色のグラデーションの巧緻さと、時に強く、時に憂いを帯びた魅惑的な眼や表情に引き込まれ、自分とどこか繋がる部分があるような、心揺さぶられる感情を覚えるだろう。

今までに国内外で多数の展覧会に出展しており、主な個展に「Stay Still」(Richard Heller Gallery、アメリカ、2023 年)、「youth」(小山登美夫ギャラリー、2018 年)、「Wandering」(Kukje Gallery、韓国、2009 年)があり、主なグループ展に、「Japanese Experience Inevitable」(ザルツブルグ近代美術館、オーストリア、2004 年)、「ライフ」(水戸美術館、2006 年)、「アイドル!」(横浜美術館、2006 年)、「Little Boy」(村上隆キュレーション、ジャパン・ソサエティー、ニューヨーク、2006 年)がある。

川内倫子

Rinko Kawauchi



川内倫子《無題》(シリーズ〈Illuminance〉より)

1972 年、滋賀県生まれ。

2002 年に『うたたね』『花火』で第 27 回木村伊兵衛写真賞受賞。2023 年にソニーワールドフォトグラフィアワードの Outstanding Contribution to Photography (特別功労賞) を受賞するなど、国際的にも高い評価を受け、国内外で数多くの展覧会を行う。

主な著作に『Illuminance』(2011 年)、『あめつち』(2013 年)、『Halo』(2017 年) など。近刊に写真集『やまなみ』『橙が実るまで』(田尻久子との共著) がある。2022-2023 年に東京オペラシティ アートギャラリーでと滋賀県立美術館で個展「川内倫子：M/E 球体の上 無限の連なり」を開催した。

キムスージャ

Kimsooja



Kimsooja, To Breathe, 2023

Site-specific installation consisting of diffraction grating film.

Installation view at Galeries Lafayette Haussmann, Paris, France, 2023

Courtesy of Lafayette Group and Kimsooja Studio. Photo by Jaeho Chong

1957 年、韓国・大邱（テグ）生まれ。現在はソウル、ニューヨーク、パリを拠点として活動。コンセプチュアルなマルチメディア・アーティストとして国際的に高い評価を受けている。

サイトスペシフィックなインスタレーションを複合的に提示することによって創出されるその作品は、美意識や文化、政治、環境といった問題をテーマとしつつ、人間の条件に関する考察の場ともなっている。

近年の主な活動としては、2023 年のフレデリクスベア美術館（デンマーク）での個展「Cisternerne」や、2022 年のメス大聖堂（フランス）のステンドグラス作品の永久設置、シドニー（オーストラリア）のニューサウスウェールズ州立美術館（AGNSW）による大型インスタレーション作品の収蔵などが挙げられる。また、「ドクメンタ 14」（ドイツ、カッセル）、ヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア）、サンパウロ・ビエンナーレ（ブラジル）など、国際展にも多数参加出品している。

ジェンチョン・リョウ

Chien-Chung Liao



Looking towards the Home, photo by mt.project

1972 年、台北生まれ。

1996 年国立台北芸術大学卒業。主に木工分野で培った大工技術を作品制作に応用している。精巧な職人技を活かし、都市の日常に溢れる機械や乗り物を巧みに模倣し、模倣物とその対象物とのあいまいな関係を探求している。鑑賞者は、本物のように見えるものが、実は精巧に模倣された物だと気付くプロセスを経験する。このプロセスによって、当たり前だと思われている周辺環境について見つめ直すことを促し、対象の背後にある鑑賞者の個人的な物語や、社会的関心を引き起こそうと試みている。

森夕香

Yuka Mori



取り込む体
Engulfing Bodies
31,8cm×41cm
和紙、日本画顔料
Japanese paper, Mineral pigment
2023

1991 年、大阪府生まれ、滋賀県育ち。

2015 年パリ国立高等美術学校派遣交換留学、2016 年京都市立芸術大学大学院修士課程日本画専攻修了。現在は京都を拠点とする。

自らの体験や感覚をもとに身体と環境が互いを内包し合い流動的に変化し続けるさまを描いている。2019 年より植物の写生を始め、植物の身体性からインスピレーションを得た絵画作品も制作している。

主な展覧会に「個展-蔓延る脈」(GALLERY SUJIN、2019 年)、「二人展-流転するあいづち」(LOKO gallery、2021 年)、「個展-雨中の肖像」(同時代ギャラリー、2021 年)、「森夕香個展」(滔々 toutou gallery、2023 年)、など。アーティストインレジデンスへの参加(artbiotop 那須、2022 年)、国内外のアートフェアへも多数参加。

森山未来

Mirai Moriyama



《The Pure Present》(2022 年／演出・出演／大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ「最後の教室」にて)

1984 年、兵庫県生まれ。

5 歳から様々なジャンルのダンスを学び、15 歳で本格的に舞台デビュー。2013 年には文化庁文化交流使として、イスラエルに 1 年間滞在、Inbal Pinto & Avshalom Pollak Dance Company を拠点にヨーロッパ諸国にて活動。「関係値から立ち上がる身体的表現」を求めて、領域横断的に国内外で活動を展開している。

俳優として、これまでに日本の映画賞を多数受賞。ダンサーとして、第 10 回日本ダンスフォーラム賞受賞。東京 2020 オリンピック開会式では鎮魂の舞を踊った。

近年の活動として、パフォーマンス「FORMULA」(2022 年、企画構成・演出・出演)、ソロパフォーマンス『Osmosis』(2023 年、金沢 21 世紀美術館 企画構成・演出・出演)、企画展「なむはむだはむ展『かいき！はいせつとし』」(2023 年、太田市美術館・図書館／神戸・バイソンギャラリー)、アートイベント「KOBRe: Public Art Project」(2023 年、キュレーション)、映画「シン・仮面ライダー」(2023 年)、『山女』(2023 年)など。2022 年 4 月より神戸市に Artist in Residence KOBE (AiRK) を設立し、運営に携わる。ポスト舞踏派。

蜷川実花

Mika Ninagawa



写真家、映画監督。写真を中心に、映画、映像、空間インスタレーションも多く手掛ける。クリエイティブチーム「EiM」の一員としても活動している。

木村伊兵衛写真賞ほか数々受賞。2010 年 Rizzoli N.Y. から写真集を出版。

『ヘルタースケルター』（2012 年）はじめ長編映画を 5 作、Netflix オリジナルドラマ『FOLLOWERS』を監督。最新写真集に『花、瞬く光』。主な個展に、「蜷川実花展」台北現代美術館（MOCA Taipei 2016 年）、「蜷川実花展—虚構と現実の間に—」（2018-2021 年・日本の美術館を巡回）。「蜷川実花展 : Eternity in a Moment 瞬きの中の永遠」（TOKYO NODE 2023-2024 年）では 25 万人を動員。

太田三郎

Saburo Ota



太田三郎《庭の情景》

1950 年、山形県生まれ。岡山県津山市在住。

71 年国立鶴岡工業高等専門学校機械工学科卒業。80 年より発表をはじめ。採集した種子を和紙に封入して、切手に仕立てた作品《SEED PROJECT》や、戦争後の様々な問題を取り上げた〈POST WAR〉シリーズなど郵便切手を用いた作品を作り続ける。近年の主な展覧会に、「太田三郎—此処にいます」（岡山県立美術館、2019 年）、「MOT コレクション Journals 日々、記す vol.2」（東京都現代美術館、2021 年）、太田三郎展：人と災いとものありよう（BB プラザ美術館、2022 年）、など。主な受賞歴に、平成 30 年度地域文化功労者文部科学大臣表彰（2018 年）、第 73 回岡山県文化賞（2021 年）など。作品は東京国立近代美術館、東京都現代美術館、国立ドレスデン版画素描館（ドイツ）、ソウル国立現代美術館（韓国）など、国内外の美術館に収蔵されている。

オウティ・ピエスキ

Outi Pieski



Outi Pieski, Beavvit- Rising Together II, 2021,
Courtesy: Minds Rising, Spirits Tuning, The 13th
Gwangju Biennale, Photo Credit: Sang Tae Kim

ラップランドのフィンランド領内に位置するウツヨキ在住。サーミ人のビジュアルアーティスト。北極圏の環境を題材とし、自然と文化の相互作用を探究するピエスキの絵画やインスタレーションは、ラディカルな中にもやわらかさを備えている。ピエスキの作品は、「ドゥオジ (duodji)」と呼ばれる身体的かつ家族的な言葉で表現される工芸的伝統を取り入れることで、国家を超えた言説の中に位置するサーミ人にまつわる対話の扉を再び開けようとする試みである。ピエスキは、フェミニスト的な表現としての手仕事の知識に関する世代間の対話の扉を開く。その先にあるのは、大地を法的権利主体とみなす意識の転換であり、大地との対話の儀礼を忘却することに対する抵抗である。ピエスキは、サーミ人が直面しているより大きな生物学的・文化的現実の再生、母系回帰、現実化などに対して疑問を提起する。

ピエスキは 2000 年にヘルシンキのフィンランド美術アカデミーを卒業した後、20 年以上にわたって国際的な展示活動を展開している。近年の展覧会としては、テート・セント・アイヴス（イングランド、コーンウォール、2024 年）、ヨーテボリ・ビエンナーレ（2023 年）、マルティン・グロピウス・パウ（ベルリン、2022 年）、ボンニエルス・コンストハル（ストックホルム、2022 年）、シドニー・ビエンナーレ（2022 年）、光州ビエンナーレ（2021 年）、ヴェネツィア・ビエンナーレ（2019 年）などがある。ピエスキの作品は、テート・モダン、ノルウェー国立美術館コレクション、ストックホルム近代美術館、ヘルシンキ現代美術館、サーミ・アート・コレクション（ノルウェー）など、数多くのコレクションに収蔵されている。フィンランド美術アカデミー賞（2017 年）、フィンランド文化財団大賞（2020 年）など受賞。

スミッタ・G・S

Smitha G S



Smitha G S, Untitled, Acrylic on Canvas, 2022
© Smitha G S

ケララ州コーリコードのマラパール地方(インド)出身。

独学のアーティストで、幼少時代に周囲にあふれていた自然のメロディーの記憶に影響を受け、動物たちや自然の緻密な美に焦点を当てた作品を制作している。スミッタの作品に描かれる人物像は脇役にすぎないことが多かったが、2010 年代になってそのスタイルに変化が起こる。ケララ州で発生したニパウイルス感染症の流行を取り上げるなど、社会的なテーマが織り込まれ、人間の脆弱さと予測不可能な動物の世界とを対比させた作品が生み出されるようになった。新型コロナウイルス感染症によるロックダウンも大きな変化をもたらし、自宅に籠っての制作の中で、幸福感に満ちた宇宙の創造に取り組むようになった。動物たちの世界を描いた初期の作品と異なり、コロナ以降の作品には人間の姿が多く描かれるようになり、そこにはマラパール地方の伝統芸能や儀式、それらと自然との関係性も取り入れられている。

スミッタの作品はボース・クリシュナマチャリのキュレーションによる 2021 年の展覧会「Lokame Tharavadu」（世界はひとつの家族）に選出された。この展覧会がスミッタのアーティストとしてのキャリアの大きな転換点となり、インド国内外の様々な芸術施設やギャラリーがスミッタの作品を評価し、購入するようになる。

坂本龍一＋高谷史郎

Ryuichi Sakamoto + Shiro Takatani



坂本龍一＋高谷史郎 《TIME-déluge》2023
木本美術館（中国、成都）「坂本龍一 | 一音一時」展
での展示風景
写真：高谷史郎

坂本龍一

Ryuichi Sakamoto

1952年1月17日、東京生まれ。（2023年没）

東京藝術大学大学院修士課程修了。1978年『千のナイフ』でソロデビュー。同年、YMOの結成に参加。1983年に散開後は『音楽図鑑』『BEAUTY』『async』『12』などを発表、革新的なサウンドを追求し続けた姿勢は世界的評価を得た。映画音楽では『戦場のメリークリスマス』で英国アカデミー賞作曲賞、『ラストエンペラー』でアカデミー賞作曲賞、ゴールデングローブ賞最優秀作曲賞、グラミー賞映画・テレビ音楽賞など多数受賞。『LIFE』、『TIME』などの舞台作品や、韓国や中国での大規模インスタレーション展示など、アート界への越境も積極的に行なった。環境や平和問題への言及も多く、森林保全団体「more trees」を創設。また「東北ユースオーケストラ」を設立して被災地の子供たちの音楽活動を支援した。

高谷史郎

Shiro Takatani

1984年より「ダムタイプ」に参加。様々なメディアを用いたパフォーマンスやインスタレーション作品の制作に携わり、世界各地の劇場や美術館で公演／展示を行う。個展「DUMB TYPE | ACTIONS + REFLECTIONS」を2018年、ボンビドゥー・センター・メッス、2019-20年、東京都現代美術館で開催。2021年、坂本龍一＋高谷史郎『TIME』オランダ・フェスティバルにて世界初演、2024年に台中國家歌劇院（台湾）、新国立劇場（東京）、ロームシアター京都にて上演。2022年、ダムタイプは坂本龍一を新メンバーに迎え、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館で新作インスタレーション《2022》展示。翌年、ヴェネチア・ビエンナーレ帰国展「2022: remap」（アーティゾン美術館、東京）。2024年、新作パフォーマンス『Tangent』ロームシアター京都にて初演、6月欧州文化首都タルトゥ2024（エストニア）、7月ヴェネチア・ビエンナーレ・ダンスで上演等。

アンリ・サラ

Anri Sala



Anri Sala
Time No Longer, 2021
Computer-generated imagery, multichannel sound, dynamic lights 13 min
Courtesy: Marian Goodman Gallery. Produced with the support of [N.A!] Project
Credits line for the images : Exhibition views from "Time No Longer" at Bourse de Commerce, 2022 - Courtesy Anri Sala & Bourse de Commerce-Pinault Collection - © Anri Sala / VG Bild-Kunst, Bonn, 2022 - Photography by Andrea Rossetti

1974年、アルバニア、ティラナ生まれ。

アンリ・サラは時間の経過によって変容する作品世界を構築する。その作品はイメージ、建築、そして音の相関関係を通じて表現される。それらの要素は、私たちの経験を折り曲げ、逆転させ、問いを投げかけるために用いられる。サラの作品が追究するのは言語や文法、音楽における断絶であり、創造的な混乱を生み出すことで歴史の新たな解釈を創出し、古いフィクションやナラティブの代替として、より暗示的かつ曖昧さを帯びた対話によって置き換える試みである。

主な個展に、ブルス・ドゥ・コメルス（パリ、2023年）、ブレゲンツ美術館（2021年）、バッファロー・バイユー・パーク・シスタン（ヒューストン、2021年）、セントロ・ボティン（サンタンデル、2019年）、ジャン大公近代美術館（MUDAM、ルクセンブルク、2019年）、カステッロ・ディ・リヴォリ現代美術館（トリノ、2019年）、ルフィーノ・タマヨ美術館（メキシコシティ、2017年）、ニュー・ミュージアム（ニューヨーク、2016年）、ボンビドゥー・センター（パリ、2012年）、サーペンタイン・ギャラリー（ロンドン、2011年）などがある。また、第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2017年）やドクメンタ13（2012年）、第29回サンパウロ・ビエンナーレ（2010年）、第4回ベルリン・ビエンナーレ（2006年）など、多くの大規模なグループ展や国際展にも参加している。2013年には第55回ヴェネツィア・ビエンナーレにフランス代表として参加した。

妹島和世

Kazuyo Sejima



© SANAA

1956 年、茨城県生まれ。建築家。

1987 年妹島和世建築設計事務所設立。1995 年西沢立衛とともに SANAA を設立。2010 年第 12 回ベネチアビエンナーレ国際建築展の総合ディレクターを務める。日本建築学会賞*、ベネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞*、プリツカー賞、芸術文化勲章オフィシエ、紫綬褒章などを受賞。主な建築作品として、金沢 21 世紀美術館*(金沢市)、Rolex ラーニングセンター*(ローザンヌ・スイス)、ルーヴル・ランス*(ランス・フランス)などがある。

*は SANAA として。

ムハンナド・ショノ

Muhannad Shono



And to Flounder in This Sea Is Sweet to Me
courtesy of Sea Art Festival Busan

1997 年、リヤド（サウジアラビア）生まれ。

民間伝承やスピリチュアルな言説、神話、都市伝説などを参照しながら、スケールや媒体、コンセプト、テクノロジーの枠にとらわれない作品を制作している。大学で建築を専攻したショノの創作活動には、既存の線引きを問い直し、その可能性や解釈を探究する態度が表れている。移民の家系である自らの家族史をインスピレーションとし、打ち捨てられた廃墟に関心を持つショノは、ストーリーテリングによって構成された作品を通じて「非帰属」という概念を探究している。ショノは、ポストミニマルの黒と白、グレーという色調によって、線と空白による創造の可能性を中心的なテーマとして展開してきた。それは、自らの線描の行為への言及でもあり、コンセプチュアルな枠組みでもある。第 59 回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2022 年）にはサウジアラビア代表として参加し、『The Teaching Tree』と題したプロジェクトを発表。その他にも、海の芸術祭（ブサン、2023 年）、イスラム・アーツ・ビエンナーレ（ジェッダ、2023 年）、ヌール・リヤド・フェスティバル（リヤド、2022 年、2023 年）、リヨン・ビエンナーレ（2022 年）、ディリーヤ・ビエンナーレ（リヤド、2021 年）、デザート X（アル・ウラ、2020 年）など、多数の国際展やフェスティバルに参加している。

国内外を問わず個展やグループ展も多数開催・参加している。主な展示にループル・アブ・ダビ（2023 年）、アートバーゼル「パルクール」（2022 年）、大英博物館（ロンドン、2021 年、2018 年）、トリノ現代美術館（GAM）彫刻庭園（トリノ、2019 年）、バルセロナ現代美術館（MACBA、バルセロナ、2018 年）、アブドゥルアジーズ王世界文化センター（イスラ、ダンマーム、2019 年）、21.39 ジェッダ・アーツ（ジェッダ、2020 年、2017 年）、世界文化の家（ベルリン、2017 年）がある。また、大英博物館（ロンドン）、アート・ジャミール財団（ドバイ）、ボンビドゥー・センター（パリ）、イスラ・アート・センター（ダンマーム）、アル・マンスーリア財団（リヤド）などに作品が収蔵されている。

サウジアラビアの国家文化賞（2021-2022 年）のヴィジュアルアーツ部門を受賞。作品集『Muhannad Shono, Works [2014-2024]』が Kehr Verlag から刊行予定。現在、リヤド在住。取り扱い画廊は Athr Gallery。

染谷悠子

Yuko Someya



Yuko Someya

知でなく意ではない。

Neither Knowledge Nor Intention.

2023

Chinese ink, water color, pencil, lithograph ink,

Japanese paper on canvas mounted on wood panel

52.5 x 68.5 cm / frame:54.5 x 70.5 cm

Photo by Kenji Tskahashi

©Yuko Someya, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

1980 年、千葉県生まれ。

2004 年東京造形大学美術学科絵画専攻卒業、2006 年東京藝術大学大学院版画専攻修了。2004 年町田市立国際版画美術館の全国大学版画展で、収蔵賞／観客賞を受賞し、作品が収蔵された。主な個展に Richard Heller Gallery (2014 年、サンタモニカ、アメリカ) があり、小山登美夫ギャラリーでは、2007 年、2010 年、2013 年、2017 年と 4 度の個展を行っている。

染谷悠子はパネルにキャンバス、そして和紙を張り、そのやわらかな風合いを生かしながら、繊細な筆致と色彩で、花や鳥、樹木、動物がモチーフの架空の世界を描く。

染谷は「言葉を綴るように、鉛筆を動かしていく」と語り、まず鉛筆の淡い輪郭線が画面を作り始める。細密画のように綿密な描写にも関わらず、絵全体の印象が非常に軽やかなのは、存分にとられた余白とのバランスと、リトインクを使った独特の手法—水彩絵具だけが塗り重ねられるのではなく、版画用のインクも用いて瞬時に彩色していく—による色彩が、透明感に溢れているからだろう。それらのモチーフは画面の十分な余白により浮遊感を与えられ、それらが紡ぐ物語、そしてその続きへと、鑑賞者を誘うかのように強い輝きを放っている。また版画の手法で色をつけられ、画面に重ねられた和紙が生み出す独特な色彩と質感も魅力である。

2004 年町田市立国際版画美術館、全国大学版画展、収蔵賞／観客賞、2014 年「VOCA 展 2014 現代美術の展望 —新しい平面の作家たち—」佳作賞受賞。

杉浦慶侘

Keita Sugiura



杉浦慶侘 (シリーズ〈新見山〉より) 2017

1980 年、岡山県津山市生まれ。写真作家。

高校卒業後教師を目指し進学するも、そこでかつて中平卓馬や森山大道が在籍していた『provoke』の写真表現に出会い、自身でも作品の制作を始め現在に至る。

自ら育った土地である岡山での撮影にこだわり「人間と自然の関係性」をテーマに活動が続ける。現在は新見市の人工林の山を中心に撮影し、人間によって造られた奇妙な自然のあり方に関心を寄せ制作に取り組んでいる。主な受賞に「第 2 回岡山県新進美術家育成『I 氏賞』」大賞(岡山、2009 年)、「福武教育文化財団 福武文化奨励賞」(岡山、2010 年)など。

立石従寛

Jukan Tateisi



Abiotope 2019 © JukanTateisi

1986 年、アメリカ合衆国シカゴ生まれ。現代アーティスト。
仮想と現実、自然と人工など、相対する境界の分解と合成をテーマに制作を行う。主な作品に、浜辺に浜辺を積層させる「Beach on Beach」、霧に向かって私的モノローグを公共放送システムに乗せて発する「To The Fog」、森の中に鑑賞空間を持ち込む「In(to)stallation」など。また、音楽や映画、パフォーマンス、フードプロダクトなど、無領域的に活動する。英国の現代アート賞「New Contemporaries 2021」入選。英国 Royal College of Art 芸術修士号修了。

リクリット・ティラヴァニ

Rirkrit Tiravanija



untitled 1990 (pad thai)
Opening event at Paula Allen Gallery,
New York, 1990.

1961 年、ブエノスアイレス（アルゼンチン）生まれのタイ人アーティスト。
旧来の展覧会形式を否定し、料理や食事、読書といった日常的な行為の共有を通じた社会的交流を提示する活動で知られている。その作品は、芸術品の優位性を拒絶する環境を創出し、モノの利用価値や、単純な行為と共同体内の相互扶助を通じて人々を互いに結びつけることに焦点を当てるとともに、労働や技巧にまつわる既成概念の打破を試みる。現在はコロンビア大学芸術学部の教授を務め、アーティストや美術史家、キュレーターが参加するコレクティブ・プロジェクト「Utopia Station（ユートピア・ステーション）」の創設メンバーでもある。チェンマイ（タイ）近郊に拠点を置く環境教育プロジェクト「The Land Foundation（ザ・ランド・ファウンデーション）」の設立にも協力した。

上田義彦

Yoshihiko Ueda



Yoshihiko Ueda, Quinault, No.1, 1991

1957 年、兵庫県生まれ。写真家。

多摩美術大学グラフィックデザイン学科教授。東京 ADC 賞、ニューヨーク ADC、日本写真家協会作家賞など、国内外の様々な賞を受賞。2011 年に Gallery916 を主宰。

代表作に『Quinault』、『at Home』、『Materia』、『A Life with Camera』、『FOREST 印象と記憶 1989-2017』、『68TH STREET』、『林檎の木』、『Mater』、『いつでも夢を』(赤々舎、2023 年)などがある。また 2021 年公開の映画『椿の庭』は大きな反響を呼び、映画監督としての仕事も注目されている。

アシム・ワキフ

Asim Waqif



Improvise

2022, site specific installation for the Kochi

Muziris Biennale

Bamboo, woven pandanus leaves, ropes

Photo: Kochi Muziris Biennale

1978 年、ハイデラバード（インド）生まれ。デリー在住。

デリーの都市計画建築学校で学び、映画やテレビ番組のアートディレクターとして働いた後、独立系の映像作品やドキュメンタリーの制作に従事。現在はアーティストとして自らの作品制作活動に取り組んでいる。

近年は建築、アート、デザインにまたがる領域横断的なプロジェクトを展開しているが、その背景には現代の都市設計や公共空間の占有／介入／利用にまつわる政策への強い意識がある。プロジェクトの一部は、社会の下層に追いやられた人々の隠れた活動空間として機能する廃墟を舞台としている。ワキフの作品には、生態学や人類学に対する関心もしばしば織り込まれている。特に水、廃棄物、そして建築に関わる地域固有の生態系管理システムについて、ワキフは広範な研究を行ってきた。その作品の多くは、制作に手作業を伴い、多大な労力を要するように意図的に仕向けられている一方で、完成した作品そのものは一過性で、やがて崩壊することを前提としているものさえもある。彫刻からサイトスペシフィックなインスタレーション、映像、写真まで幅広く制作し、最近では伝統的な手法と新たなテクノロジーを融合させた、大規模でインタラクティブなインスタレーションも手掛けている。

八木夕菜

Yuna Yagi



《Light/光》Cyanotype print on Japanese paper, Kakejiku
W634 x H957 mm (2021)
© Takeshi Asano-KYOTOGRAPHIE 2021

1980年生まれ。京都拠点。

パーソンズ美術大学建築学部卒業。写真を軸に「見る」という行為の体験を通して多視点観点から意識の変容を促す作品制作を行っている。代表的な個展に、種が持つ生命の営みの儚さや豊かさを紡ぐ「種覚ゆ/The Record of Seeds」(KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭、2021年)、「NOW/HERE」(Pola Museum Annex、2018年)、「視/覚の偏/遍在」(√K Contemporary、2022年)など。主な作品に、写真を立体に立ち上げた《KENCHIKU》(2015年)、写真にアルゴリズムを施した《崩れゆく世界》(2016年)、日本人の死生観を考察した《祈りの空間》(2017年)、「空」の概念を表した《BLANC/BLACK》(2019年)、写真における静物画《Superposition》(2024年)など。主な受賞に「京都国際写真祭」ポートフォリオレビュー最優秀(2016年)、「第35回写真の町東川賞」新人作家賞ノミネート(2019年)。金沢21世紀美術館収蔵。

ジャコモ・ザガネッリ

Giacomo Zaganelli



Giacomo Zaganelli, Somsed Temporary
Cultural Center, Thailand Biennale 2021,
Korat Thailand

1983年、イタリア生まれ。フィレンツェとベルリンを拠点に活動。

地域コミュニティを対象とした芸術文化プロジェクトのアーティスト、キュレーター、および活動家。土地、環境、景観を通じて解釈される空間の概念の社会的及び公共的な側面をリサーチする。2010年には、空き地が提供する可能性について市民と行政の意識を高めるため、放棄された遺産をテーマにした先駆的な研究プロジェクト「La Mappa dell'Abbandono: 見捨てられた場所の地図」を立ち上げた。2015年以来、台湾と日本で継続的に活動している。

近年の主な活動に、個展「Superficially」(2018年、MOCA 台北)、「Grand Turismo」(2018・2019年、フィレンツェ ウフィツィ美術館)がある。また、瀬戸内国際芸術祭(2019年、日本)、タイランド・ビエンナーレ(2021年、タイ)に参加した。

ほか2名公開準備中

(4) アートイベント

作品展示のほかにも、会期中を中心に、参加アーティストによる地域の特色を生かした様々なアートイベントを開催します。域外から訪れる来場者に加え、多くの地域住民等がアートイベントに参加することにより、交流の促進を図ります。

6 広報

(1) 方針

本芸術祭は初回開催であることから、まずは地域の方々の理解促進と芸術祭の認知度向上に注力し、地域の方々に対するプロモーションを実施するとともに、国内外への発信により幅広い層からの誘客と多様な主体の参画に結びつけることを目指します。

また、開催エリアの持つ雄大な自然や歴史ある町並み、食文化などの優れた観光資源をPRし、芸術祭を起点とした周遊の促進や地域観光のリピーターの増加に繋がります。

(2) 取組内容

公式ウェブサイトやSNS等の媒体を活用し、アート作品や各種イベントなど芸術祭に関する情報を準備段階から発信することで、本芸術祭や地域の魅力を伝え、期待感の醸成に繋がります。

また、本芸術祭の認知拡大や参加促進を図るため、行政や報道機関、観光関係団体等の様々なルートから、各ターゲットに応じた効果的な情報発信を行うとともに、本芸術祭のイメージを広く伝えるため、統一感のあるデザインを用いた制作物によりブランディングの浸透を図ります。

① 国内向け広報

シンポジウムやトークイベント等のプレイベントを開催し、地元の方々の理解促進を図ります。また、芸術祭の認知度向上を図るため、ポスターやチラシ、新聞等のオフライン広告の活用により、芸術祭情報に触れる機会を創出するとともに、SNSを中心に開催エリアの地域情報を含めたプロモーションを行い、アートに関心の薄い層にも情報を届け、国内から多くの来場を促します。

ア プレイベント

(ア) アーティスト・イン・レジデンス

令和4年11月、国内外から2名のアーティストを招聘し、作品制作やトークイベントなどを実施しました。

(イ) シンポジウム

令和5年12月、「森の芸術祭は地域に何をもたらすのか」をテーマにしたパネルディスカッションや「“森”の魅力とアート」と題したトークセッションを実施しました。

(ウ) トークイベント

令和5年12月～令和6年3月、アート作品設置5市町において、アートディレクターらが地域住民等と交流を図りながら、各地域の印象や作品の展開などについて語るトークイベントを開催しました。

(エ) 開幕前イベント

芸術祭開幕を控え、地域の機運醸成を図るため、参加アーティストと連携し、イベントを開催します。

イ ポスター、チラシ、パンフレット等

開催エリア内のＪＲ各駅や公共施設、文化施設等にポスターの掲出を行うとともに、各種イベント等においてチラシ・パンフレットの配布を行います。

また、作品やアーティストに関する情報や観光情報等を記載した公式ガイドブックなどを、インフォメーション・センター等で販売します。

ウ 公式ウェブサイト

公式ウェブサイトにおいて、作品やアーティストに関する情報に加え、観光・イベント情報など芸術祭に関するあらゆる情報をわかりやすく発信します。

エ ＳＮＳ

ＳＮＳの持つ即時性と拡散力を最大限活用し、アーティストやイベント等の最新情報に加え、利用者に臨場感を感じさせるよう、作品制作風景など現場からのタイムリーな情報を効果的に発信し、来場意欲を高める工夫を行います。

また、来場者が楽しめる観光情報等も積極的に発信します。

オ 新聞、テレビ、ラジオ等

地元新聞、テレビ、ラジオ、雑誌など各種メディアを積極的に活用して、芸術祭やイベント情報の発信を行います。

キ 県・市町村広報紙

県広報紙「晴れの国おかやま」へ芸術祭やイベント情報を定期的に掲載するほか、市町村広報紙へも地域の関連情報を掲載します。

ク 各種イベントにおけるブース出展等

様々な主体や場所において開催されるイベントに積極的にブースを出展し、芸術祭のPRを行います。

② 海外向け広報

多言語対応の公式ウェブサイトや広報資材等を活用し、情報発信するとともに、岡山県が実施する海外観光プロモーション等と連携し、旅行者へ情報発信することなどにより、海外からの来場者の増加に取り組みます。

また、海外の芸術祭においてPRを行います。

③ メディア向け広報

美術系や旅行系など幅広い分野のメディアへ情報提供するとともに、芸術祭の開幕に合わせ、メディアツアーを実施し、作品とともに県北部の魅力にも触れてもらい、観光振興にも繋がる効果的な情報発信を行います。

ア プレスリリース

作品やアーティスト、イベントなどのプレスリリースを適宜行い、美術系や旅行系など幅広い分野のメディアへ情報提供します。

イ メディアツアー

作品設置会場を周遊するメディアツアーを行い、記事掲載を促します。

7 交通対策

(1) 方針

本芸術祭の開催エリアは広範囲に及ぶため、来場者の交通利便性の向上を図ることはとても重要です。特に、国内外から様々な交通手段による来場があることを想定し、自家用車等だけでなく公共交通でも周遊できる環境を整備することが必要です。

来場者に、より多くのアート作品と周辺の観光等を楽しんでもらえるよう、交通事業者等と連携し、効率的かつスムーズな移動の確保に努めます。

(2) 取組内容

① 鉄道

J R 津山線や姫新線、伯備線などを活用した円滑なアクセスの確保を図ります。

② バス

ア オフィシャルツアーバス

本芸術祭の広域なエリアにある作品設置会場を効率よく鑑賞できるガイド付きオフィシャルツアーバスを、土日祝日を中心に複数のコースで設定します。

イ エリア拠点間バス

公共交通が不足しているエリア間を繋ぐため、既存の公共交通機関等との組合せも可能なバスを毎日運行します。

ウ 会場行バス

市町村等と連携し、作品設置会場や観光地へのアクセスを確保するためのバスを運行します。

③ 自家用車等

自家用車やレンタカーなど車を利用した来場者の利便性向上を図るため、会場付近の駐車場一覧表の作成や駐車場看板の整備など分かりやすい案内に努めます。

④ レンタカー、タクシー等

自治体や観光団体等が実施する事業を活用し、芸術祭の会期中におけるレンタカーや観光タクシーの利用促進を図ります。

⑤ 環境に配慮した移動手段

市町村等が実施する事業を活用し、芸術祭の会期中における E-BIKE、レンタサイクルなどの充実を図ります。

8 来場者への対応

(1) 方針

本芸術祭では、来場者の利便性や満足度の向上を図るため、周遊モデルコースの提案や、宿泊施設や飲食店などの旅行情報を来場者にわかりやすく提供し、滞在・周遊型の観光促進に繋がります。

また、来場者等が不自由なく芸術祭を楽しんでもらえるよう、受入環境の整備を行います。

(2) 取組内容

① 情報提供

ア 公式ウェブサイト

アート作品や各種イベントなど芸術祭に関する情報のほか、来場者が事前に旅行計画を立てる段階で必要な情報を効率的に得られるよう、Googleマップも活用しながら、エリア内の二次交通や周遊モデルコース、宿泊施設や飲食店などの情報を公式ウェブサイトに集約し、発信します。

イ 紙媒体

展覧会に関する情報や観光地等の情報を掲載した公式ガイドブックやマップ等を作成し、来場者に販売・提供します。

ウ インフォメーション・センター

本芸術祭では、アート作品設置会場間の距離が離れているため、会場のあちこちにインフォメーション・センターを設置します。

インフォメーション・センターでは、展覧会に関する情報の提供を行うとともに、周辺の観光地等の情報や、二次交通など、来場者が周遊するために必要な情報の提供を行います。また、有料の会場を設置する市町のインフォメーション・センターにおいては、鑑賞券やオフィシャルグッズを販売するなど、来場者の利便性や満足度を向上させるためのサービスを提供します。

② 周遊モデルコースの作成

来場者のニーズや交通手段に合わせて芸術祭を楽しんでもらえるよう、来場者にわかりやすい周遊モデルコースを複数作成します。

③ 旅行事業者への働きかけ

アート作品と合わせて周辺の観光などを楽しむための情報を旅行事業者に積極的に提供することなどにより、旅行商品の造成を働きかけ、誘客促進を図ります。

④ 会場サインの整備

来場者がスムーズに目的地にたどり着けるよう、誘導用の会場サインを設置します。その他にも、鑑賞における注意事項などを示した会場サインを各所に設置し、来場者の安全確保に努めます。

⑤ 作品鑑賞ガイド

幅広い来場者に芸術祭を楽しんでもらい、作品に対する理解を深めてもらうため、来場者を対象とした作品鑑賞ガイドを行います。

⑥ 多言語対応

海外からの来場者向けに、広報媒体や会場案内等の多言語対応に取り組めます。

⑦ バリアフリー対応

大学と連携し、会場内における車いす利用者等への対応に関するマニュアルを作成し、これに沿った対応を行います。

9 観光・文化関連イベント

(1) 方針

観光振興及び文化振興の両面から地域振興を図るため、市町村や観光団体、文化団体とも連携し、各種イベントを実施します。

観光振興については、開催エリアの観光資源を活用したイベントを開催し、来場者の周遊の促進を図ります。

文化振興については、芸術祭と関連したイベントの開催や、来場者の文化施設への誘客を図ります。

(2) 取組内容

芸術祭の開催効果を最大限発揮できるよう、開催エリア内で行われる観光・文化関連イベントと連携し、さらなる誘客や地域の活性化に繋がります。

① 公式事業

ア 特製パフェ

本芸術祭の開催エリアの特産品を使用した特製パフェを開発・レシピ化し、開催エリアを中心に、カフェ等において広く展開していきます。

イ 地域イベント

来場者に楽しんでもらえるよう、地域づくりに関わる人々などと協働し、地域の特色を生かしたイベントを企画・実施します。

② 連携事業

ア PICK UP PROGRAM

魅力発信や誘客促進に繋がるイベントなど、来場者に特に推奨したい開催エリア内の取組を「PICK UP PROGRAM」として位置づけ、芸術祭とともに盛り上げていきます。

イ FRIENDS PROGRAM

相互に連携することで相乗効果が期待できる開催エリア内のイベント等を広く募集し、「FRIENDS PROGRAM」として位置づけ、芸術祭とともに盛り上げていきます。

ウ 特別連携事業

芸術祭参加アーティストが関与するなど、芸術祭と特に親和性が高い特別な企画を「特別連携事業」として位置づけ、芸術祭と相互に連携することで双方の事業を盛り上げます。

1 0 地域連携・学校連携

(1) 方針

芸術祭の開催を契機に、多様な主体と連携し、地域の特色を生かした様々な取組を行うことにより、地域固有の文化資源の魅力を再発見し、新たな魅力の創出を促進します。

さらに、教育機関と連携し、次世代を担う子どもたちが豊かな感性や創造性を育む場として、芸術祭の開催効果を教育に還元します。

(2) 取組内容

① 地域連携

地域住民にアート作品の制作等に参加してもらうことにより、参加アーティストとの交流を促進します。

また、地元企業や学校、地域づくりに関わる人々などと連携し、各種イベントの開催や芸術祭にちなんだ商品の開発など、地域の特色を生かした様々な取組を行い、地域づくりに生かしていきます。

② 学校連携

児童生徒が教育活動の一環として芸術祭を訪問し、国内外のアーティストによる多様で質の高いアート作品を鑑賞することができるよう、教育委員会や学校と連携し、次世代を担う人材の育成を図ります。

また、多くの大学生にサポートスタッフとして芸術祭に参加してもらえるよう、県内の大学と連携します。

ア 学校連携プログラム

学校と連携し、児童生徒が校外学習として芸術祭を訪問し、アート作品を鑑賞します。また、鑑賞の効果を高めるため、芸術祭スタッフによる作品案内を行います。

イ 大学連携プログラム

県内の大学と連携し、大学生にサポートスタッフへの参加を呼びかけるとともに、大学の履修科目の一環として、学生が来場者の鑑賞をサポートする実習講座を実施します。

1 1 サポートスタッフ

(1) 方針

本芸術祭の成功には、多くのサポートスタッフの協力が不可欠です。会期中の運営サポートのみならず、来場者がエリア全体の周遊を楽しめるよう、コンシェルジュとしての役割も期待されます。

これらのサポートスタッフを、関係団体と連携しつつ、幅広い年代から募集するとともに、人材の育成にも取り組みます。

(2) 取組内容

① 活動内容

サポートスタッフは、来場者の受付、会場や作品の案内といった会場運営サポートに加え、周辺観光施設やアクセス方法の案内といった周遊サポートも行います。その他にも、作品制作の補助や、来場者への鑑賞ガイドなど、多岐にわたる活動を行います。

こうした経験をすることにより、サポートスタッフが、社会参加意欲の充足を感じ、やがては芸術祭と地域のファンとなってもらえるよう目指します。

また、これらの活動を通じてアーティストや地域づくりに関わる人々と交流することにより、アートによる地域活性化に取り組む人材の育成にも繋がっていきます。

② 募集

地域住民や地元企業、学校など、地域と密接な関わりを持つ人々がサポートスタッフとして芸術祭に関わり、来場者やアーティストと交流することが、地域づくりの観点からも重要です。そのためにも、地元町内会や地元企業、学校等に対し、サポートスタッフへの積極的な参加を働きかけます。また、ウェブサイトやSNSも活用し、県内のみならず県外からの参加も募ります。

③ 研修

サポートスタッフの活動内容は多岐にわたるため、活動内容に応じた適切な研修プログラムを作成し、研修を実施します。

1 2 企業協力・協賛

(1) 方針

本芸術祭の開催趣旨に賛同する企業の協力・協賛を得ることで、芸術祭の成功と強固なパートナーシップの構築に繋がります。

(2) 取組内容

本芸術祭の開催趣旨に賛同する県内外の企業に対し、積極的に協力・協賛を呼びかけ、より多くの企業とのパートナーシップ構築を目指します。また、各企業独自の事業分野における様々な協力を得ることで、他の芸術祭との差別化や開催趣旨の多角的な実現を図ります。

また、社会貢献活動を積極的に推進している企業に対し、企業サポーターとしての参加を働きかけ、企業と地域のつながりの創出を図ります。

1 3 鑑賞券・オフィシャルグッズの展開

(1) 方針

来場者の利便性を考慮した鑑賞券制度を設計します。また、本芸術祭のみならず、地域の魅力も発信できるよう、ロゴマークや地域の特色を生かした魅力的なオフィシャルグッズを開発します。

(2) 取組内容

① 鑑賞券

アート作品を鑑賞するために必要な鑑賞券として、鑑賞パスポートと単館鑑賞券の2種を販売し、プレイガイドや旅行事業者等を通じて国内外に販売網を整備します。

なお、鑑賞パスポートは、電子券の販売も行います。

鑑賞券の価格				
区分	鑑賞パスポート ^(注1)		単館鑑賞券	単館鑑賞券 (施設入場券)
	前売	当日		
一般	2,500 円	3,000 円	無料施設 の場合	有料施設 の場合
大学生 専門学生	1,500 円	2,000 円	700 円	施設入場料金
高校生以下 障がい者等	無料		無料	無料 ^(注2)

- 注： 1) 鑑賞パスポートは、会期中を通じて利用可能ですが、入場は原則として1会場につき1回のみとし、当日に限り再入場が可能です。
 2) 一部の有料施設では、高校生以下及び障がい者の施設入場料金が有料となる場合があります。
 3) 公共の場所に設置するアート作品の場合、鑑賞券の購入は不要

② オフィシャルグッズ

ロゴマークや地域の特色を生かした魅力的なオフィシャルグッズを開発し、インフォメーション・センターなどで販売します。

③ 地産品等

開催エリアのおすすめの地産品等を選定し、専用ロゴマークを付与するとともに、公式ウェブサイトへの掲載や駅等での販売を行います。

